

30年のあしどり



指定管理者 社会福祉法人 群馬県社会福祉事業団
一般社団法人 群馬県ビルメンテナンス協同組合

群馬県立ふれあいスポーツプラザ

事業風景(春)



転倒予防教室



GW イベント (凧あげ)



アーチェリー教室



エコ作品作り



健康講座



クリーン作戦



季節の手作り体験



お花見

事業風景(夏)



アウトドア体験



出前事業



ランチコンサート



ふれあい教室 I 期



団体サポート



軽スポーツ体験



アーチェリー認定会



アウトドアスポーツ体験

事業風景(秋)



陸上競技交流会



ふれあい祭



ふれあい陸上競技交流会



季節の手作り体験



敬老の日



障がい者 GG 大会



障害児運動教室



出前事業

事業風景(冬)



クリスマスイベント



長距離水泳記録会



ふれあい卓球大会



ポッチャ交流会



軽スポーツ体験



障害者スポーツ体験学習



中級水泳教室



ふれあい水泳記録会

講習会・職員研修



日赤救急法



近隣区長会議



ボランティア講習会



アーチェリー場利用安全講習会



緊急訓練



職員研修



職員研修



防災訓練

開館30周年によせて

群馬県知事 山本 一太

群馬県立ふれあいスポーツプラザは平成3年に開館し、このたび30周年を迎えました。

この施設は、昭和56年の国際障害者年と昭和58年開催の全国障害者スポーツ大会を契機に障害者スポーツに対する県民の関心が深まる中、障害者及び高齢者がいつでも安心して利用できる、総合スポーツレクリエーションセンターとして設置されました。

開館以来270万人を超える方々に親しまれてきましたのは、利用者のみならず、その御家族、関係団体及びボランティアの方々の御支援の賜であり、深く感謝申し上げます。



さて、新型コロナウイルス感染症の拡大により、私たちを取り巻く環境は一変いたしました。外出の自粛や経済活動の制限等を余儀なくされ、新しい生活様式による、新しい日常（ニューノーマル）への対応が求められています。本県では、こうした状況を踏まえ、昨年12月、20年後のニューノーマル社会でのトップランナーになることを目指し、新・群馬県総合計画ビジョン「群馬から世界に発信するニューノーマル～誰一人取り残さない自立分散型社会の実現～」を策定しました。このビジョンは、年齢や性別、国籍、障害の有無等にかかわらず、誰一人取り残されることなく、自ら思い描く人生を生き、幸福を実感できる自立分散型の社会を構築することを理念・哲学としており、ビジョンの実現に向けて、目標を設定して各種政策に取り組んでいるところです。

また、本年は東京2020パラリンピック競技大会が開催され、改めて障害者スポーツに関心が集まりました。パラリンピック大会では「多様性と調和」を基本コンセプトの一つとし、世界中の人が多様性と調和の重要性を改めて認識し、共生社会を育む契機となるような大会が目指されました。

令和11年には、本県において全国障害者スポーツ大会が開催される予定です。ふれあいスポーツプラザでは、この機会を最大限に活かし、これまで以上に利用者の立場に立った質の高いサービスの提供とスポーツ・レクリエーション活動を通じた交流機会の提供により、障害者スポーツの一層の振興を図ってまいります。そして、ビジョンに掲げる自立分散型社会、共生社会の実現に繋がるよう、全力で取り組んでまいります。

結びに、長年にわたり「ふれあいスポーツプラザ」を温かく支えていただきました関係者各位に衷心より感謝を申し上げまして挨拶といたします。

「開館30周年にあたって」

社会福祉法人 群馬県社会福祉事業団
理事長 塚越日出夫

群馬県立ふれあいスポーツプラザは、障害者及び高齢者のスポーツ・レクリエーション活動の振興並びに社会参加の促進を図るため、群馬県が設置する施設として、平成3年7月21日に開館し、本年度で30周年を迎えることとなりました。

当法人は、開設当初から施設の管理運営を受託し、通常の施設運営に加え、初心者から競技力向上までの各種教室・大会の開催、ボランティアの育成及び専門的知識を有する職員の育成等に努めてまいりました。また、平成18年4月1日以降は、指定管理者として運営を行っているところです。そして、これまでに延べ275万人を超える皆様にご利用いただいています。



この10年を振り返ると、障害者スポーツを取り巻く環境は、大きな変貌を遂げています。2011年に障害者スポーツの基本理念が「スポーツ基本法」に制定されたことを皮切りに2012年には「スポーツ基本計画」策定、2016年には障害者スポーツ事業が文部科学省へ移管となり、健常者と障害者のスポーツを一体として推進していくこととなりました。さらに、2020オリンピック・パラリンピック東京大会の開催が決定し、障害者スポーツへの関心の高まりと理解促進が進んできました。

一方で、近年フレイル予防が注目されており、高齢者が適度な運動を行い、筋肉量の増大や筋力強化、歩行能力やADL、身体機能の向上を図ることが、健康寿命を延ばすことにもつながるといわれています。

障害者や高齢者をはじめ、全ての方々が楽しめるスポーツの裾野の拡大やスポーツに親しめる環境を充実させる取組を継続して取り組むことがふれあいスポーツプラザの大きな役割であり、その役割を最大限に引き出せる施設運営を行うことが当法人の使命であると考えています。これからも群馬県の障害者及び高齢者スポーツの拠点として、県民から親しまれ、利用される施設づくりに邁進する所存です。

結びに、これまで長期にわたりあたたかいご指導、ご支援をいただきました利用者の皆様、群馬県及び関係各位の皆様にご心より感謝を申し上げます。

ふれあいの思いをつなぐ

群馬県立ふれあいスポーツプラザ
館長 延命 敏勝

当館の正門を入って右手の木立の中に、「愛の火」と書かれた石碑があります。昭和58年に本県で開催された第19回全国身体障害者スポーツ大会（愛のあかぎ大会）の炬火が、当時まだ建設予定地だったこの地で採火されました。そして、平成3年7月21日、全国に先がけて一般県民も利用できる「ふれあい」型として、当館は開館しました。



開館当時は、まだ「持続可能な開発目標SDGs」の考え方はありませんでしたが、名称にあえて「ふれあい」の文字を冠したのは、障害者を含め誰もが、社会の一員としてそれぞれに役割と居場所を持つ、「共生」あるいは

「社会的包摂」を理想とする思いを込めたのであり、この思いは、「誰一人取り残さない (leave no one behind)」というSDGsの理念と繋がっています。

開館30周年を迎える今年、東京2020パラリンピックが開催されます。パラリンピックもまた、「多様性を認め、誰もが個性や能力を発揮し活躍できる公正な機会が与えられている場」（日本パラリンピック委員会）であります。

今大会に出場する競泳の由井真緒里選手は、当館の水泳教室をきっかけに本格的に水泳を始めました。また、シドニー、アテネ、北京、ロンドンの4大会に出場した競泳の奈良恵里加選手をはじめ、何人もの利用者がパラリンピックに出場したことは、障害者スポーツの拠点でもある当館の誇りです。

当館の玄関ホールの上壁には、人と鳥とがふれあい自由に羽ばたきながら、豊かに成長していく様子を表現した、大きな陶板レリーフがあります。コロナ禍で、人と人との距離 (distance) が求められる中で、名称に冠した「ふれあい」の思いを、次の時代に繋いでいくことが、私たちの務めだと感じています。

30年の長きにわたり、お力添えをいただきました利用者の皆様、関係各位の皆様に、心から感謝を申し上げます。今後も変わらぬ御指導と御支援をいただきますよう、お願い申し上げます。

「これからも、障がい者、高齢者の活動の拠点として」

群馬県ビルメンテナンス協同組合

理事長 塚田 且美

群馬県立ふれあいスポーツプラザは創設 30 周年を迎えます。

当施設は障がい者、高齢者が可能性を広げることが出来るスポーツ・レクレーション施設としてまた、一般の方々も共に利用でき、地域社会との相互ふれあい、交流・憩いの場として 1981 年（平成 3 年）開設以来活発に活動が行われてきました。

先を見据えた活動の場として、県民の皆さんの交流の拠点として誠の的を得たオープンであったと思えます。大きな陸上競技場、プール、トレーニング室、テニス



コート、等々で障がい者・高齢者の皆さんが活動されている姿を見ていると、その存在価値を改めて認識することが出来ます。また、ボランティアの方々の共助も大変有難く、ふれあいスポーツプラザの目的を一層高め、和気あいあいと皆さんが活動されています。

社会福祉法人群馬県社会福祉事業団の皆さんと我が業界が少しでもお手伝いできればと、わが業界は施設のメンテナンス（環境、設備、清掃など）を行っています。皆さんが快適に安心して活動するために日常のメンテナンスを懸命に行ってまいりたいと思います。

しかし、ここ 1 年余は新型コロナウイルス感染症の蔓延のため、幾分活動制限が余儀なくされています。しかし、やがて、明るくて大きな笑い声が、響き渡る時が来ます。もう先に見えてきました。

障がい者の皆さん、高齢者のみなさん、そして地域のみなさんが共に生き生きとした活動がこれからも継続できますように、すこしでもお手伝いできたらと思っています。ふれあいスポーツプラザが 30 周年を迎えるにあたり、さらなる発展に向けて思いを新たにするとともに、関係各位のご苦勞に対し心から謝意を申し上げます

御 寄 稿 文

開館30周年によせて

一般社団法人 群馬県障害者スポーツ協会
会長 川原 武男

群馬県立ふれあいスポーツプラザが、東京オリンピック・パラリンピックが開催されたこの記念すべき年に、開館30周年を迎えられたことを心からお祝い申し上げます。

私どもは、当初はプラザにおいてその業務を担っていただいておりますが、平成5年に知的障害者スポーツ協会として独立し、その後、平成24年に身体・知的・精神の3障害を統合した県障害者スポーツ協会として発足、現在もプラザ内に事務局を構え、当施設を拠点に多くの事業を開催させていただくなど、プラザとともにこの30年間を歩んで参りました。

また、障害者スポーツのスペシャリストである職員の皆様には、全国障害者スポーツ大会への指導者としての参加をはじめ、県障害者スポーツ大会の会場設営や運営等、当協会の事業に絶大なご支援・ご協力をいただいております。

特に、アスリートの練習拠点としての役割は大きく、4大会連続でパラリンピックへ出場しメダルを獲得した奈良恵里加選手や、今年開催された東京パラリンピックへ出場し活躍した由井真緒里選手を輩出されています。

この30年において、障害者スポーツへの関心は飛躍的に高まってきており、2029年に本県で開催予定の全国障害者スポーツ大会に向けて、更なる発展が期待されております。

今後とも、本県はもとより、全国における障害者スポーツの拠点として、多くの皆様から愛され利用される施設として発展していくことをご期待しております。

「あしどり」30周年記念に向けて

群馬県障害者スポーツ指導者協議会
前会長 櫻井秀雄

群馬県立ふれあいスポーツプラザ開設30周年、誠におめでとうございます。

平成3年に創設されて以来、群馬県の障害者スポーツの殿堂として、県下はもとより、広く全国の障害者スポーツの普及・振興に携わってきたことに深く敬意を表します。

私たち協議会は、平成13年に設立され、群馬県のご指導ご支援をいただき、群馬県立ふれあいスポーツプラザ内に事務局を置き、障害者スポーツ指導者の養成と資質の向上を図り、障害者スポーツの普及及び振興に寄与することを目的に活動しております。

群馬県立ふれあいスポーツプラザの事業推進にあたり、ふれあい水泳記録会、ふれあい卓球大会等のイベントや、スポーツ・文化教室、ふれあい祭等の交流会にも、積極的に協力させていただくなかで、障害者スポーツ指導についての体験や、実践をとおしたさまざまな指導方法など、深く学ばせていただきました。

また、本協議会は、群馬県障害者スポーツ協会の密接な団体であり、群馬県立ふれあいスポーツプラザを会場にした、群馬県障害者スポーツ大会「レクリエーション部門」の運営や、全国障害者スポーツ大会群馬県選手団の監督、コーチとして、アーチェリー、フライングディスクの選手強化指導にも携わらせていただきました。

これからも、群馬県立ふれあいスポーツプラザの温かいご指導ご支援をお願いするとともに、貴館の益々のご発展を祈念しお祝いの言葉とさせていただきます。

選手生活を振り返って

奈良 恵里加

私が水泳を始めたのは幼少のころ。生まれて間もなく「脳性麻痺による体幹機能障害」を背負ってしまい、産まれた当時の病院では「脳性麻痺危険児で、機能訓練をしなければ一生歩けるようにはならない」と言われリハビリで始めた水泳でふれあいスポーツプラザの副館長である柴田安秀コーチと出会い1996年に開催された障害者向けの広島国体に出場したことがきっかけで競技の道に進みました。その時から柴田コーチと2人3脚での練習が始まり国内の大会で優勝するとともにだんだんと世界で活躍できるまでになりシドニー、アテネ、北京、ロンドンと、4度のパラリンピックに出場することができました。

脳性麻痺による体感機能障害を持ち、「機能訓練をしなければ一生歩くことはできない」と言われた私ですがリハビリで始めた水泳でふれあいスポーツプラザと出会い柴田コーチをはじめ職員の皆さまそして多くの方々の励ましや応援があったからこそここまで来ることができました。東京パラリンピック出場を目指して練習に励んでいたのですが、残念ながら出場することはできなかったため引退となります。引退しても「自分の可能性を信じて」何事にも挑戦しさらなる飛躍を目指します。本当にありがとうございました。

30周年記念のお祝いと、感謝の気持ちを込めて

ふれあいスポーツプラザでの私の思い出

細野 定 伸

ふれあいスポーツプラザ開館30周年記念おめでとうございます。私がふれあいスポーツプラザに行ったのは平成4年2月の卓球教室に参加させてもらったのが最初でした。それから30年近くも利用させて頂いていますが指導員に厳しく、また楽しく相手をして頂きふれあい大会にも参加できるようになりました。

文化教室に参加して糺絵を教えてもらいました。糺を一粒一粒ピンセットを使いボンドで貼り付ける作業でした。私は二匹の鯉を作りましたが上手く出来ない先生がバリバリ剥がしてしまいもう一度やり直しを命じられ苦戦をしました。教室の予定日数では仕上がらず家に持ち帰って頑張りどうにか仕上げる事ができました。作品は額に入れて大切に保存してあります。

アーチェリー教室に参加して職員に1年間指導して頂き一人で練習出来る様になって毎日の様にプラザに練習に行つてふれあい大会や県大会に参加しました。全国障害者スポーツ大会に推薦していただき兵庫大会と長崎大会に参加させてもらい職員が付き添いで行つてくれました。東京オリンピックの開催が決まりプラザがリニューアルして70mまで射る様になったのですが練習する前にコロナ禍になってしまい思う様に練習が出来ずみんなが大変な思いをしています。1日も早くコロナ騒動が終息して前の様にプラザが利用できる様になる事を一緒に楽しんできた仲間と共に願っています。

—ふれあいスポーツプラザと共に—

生 方 潤 一

振り返るとふれあいスポーツプラザは、いつも自分と共にありました。‘92年に怪我をし、長い入院生活を送り、車いすがなくてはならない生活。そんな自分にとってプラザは、社会復帰の一步でした。出会ったのは、‘93年。それからは生活の一部となりました。

グラウンドで車いす陸上のトレーニングをするようになり、全国障害者スポーツ大会に参加するきっかけを頂きました。そこから、ジャパンパラリンピックやマラソン大会へと世界を広げることができました。プラザと共に歩んできた29年。ストックにアクティブにそして目標に向かって挑戦してきました。自分に自信が持てるようになり仕事にもその気持ちが反映されるようになりました。現在は、健康維持の為、トレーニング室を活用しつつ、プラザで実施している、陸上教室やふれあい祭に携わっております。

自分自身が、障害をもつ事の不安をスポーツをすることで世界観を広げることができたように、それぞれのスタンスでスポーツを体験できる場があることを、応援していきたいと思います。

ふれあいスポーツプラザの存在とスタッフの皆様に心から感謝申し上げるとともに、益々のご発展をお祈り申し上げます。